

1 年 目 の 実 践

国語教育講座・東 賢司

1. 講義のねらい

教育実践体験実習(以後、ふるさと実習と呼ぶ)は、選択科目であるが、自分が生まれ育った小学校や中学校で教師の経験ができるという全国的にも珍しい試みである。本年度が初年度であるが、80名もの参加者があり、何とか終了することができそうである。

ふるさと実習は、教師が日常どのような一日を送り、子どもたちと接し、どのような業務を行っているのかを肌身をもって感じてもらいたいという実習である。児童・生徒の補助を務めることはあっても、教壇にたって授業をすることは無い。これは、教壇実習を中心に行っているいわゆる「教育実習」と一線を画すためでもあるが、実施学年が2年生というまだまだ現場経験に乏しい学生たちが対象となる実習であるので、無理なことはさせないという配慮もあるであろう。期間も1週間というわずかな日数にしているのは、受け入れ校への配慮や学生たちの体力的な心配から設定されている。

2. 実習の概要と手続き等

教師の仕事理解といっても大変と漠然としていて掘みづらいが、各学校に指導の教諭を決めていただき、その先生に付き添って1週間先生の動きを観察するという方法はすべての学校で一致している。とはいっても学校行事などによって1週間の予定は大きく異なる。多くの学生が参加した9月前半は、松山市内の学校は運動会の準備がほとんどであり、勤務時間内の多くを校舎の外で過ごしたという学生もいた。個別具体的な指示は学校にお任せしていることは言うまでもない。

学生を派遣するまでの準備は実習カリキュラム委員会が企画実施した。委員長・副委員長を始め、多くの方のエネルギー注入によって実施が可能となった。とりわけ学務チームの協力なくしては、実施はあり得なかったと

感じている。主たるガイダンスは以下のように行ってきた。

月日	時間	内容
2/1	14:50 ~ 16:20	ふるさと実習説明会
6/5	12:10 ~ 12:50	ふるさと実習(松山市内の教育実習を希望する学生)手続き説明会
6/21	16:30 ~ 17:30	ふるさと実習ガイダンス(事前指導)
6/26	12:10~12:50	追加ふるさと実習ガイダンス(事前指導)
11/22	14:50 ~ 16:20	ふるさと実習事後指導(学生報告6件を含む)

この実習は、自分の出身校が基盤となるが、個々の都合により、恩師の所属する学校や大学周辺の学校で参加することも可能である。松山市内での実習を希望する学生も20名ほどになったが、松山市教育委員会のご配慮で、できるだけ学生の希望に添うように学校を決めてくださった。また実習へ参加するための履修条件を三種類(地域連携実習に3回以上参加、実践入門の合格、主任の推薦)をもうけ、「教員志望の強い学生」を送り出すことを目指した。

3. 学生の感想など

実習実施のご快諾をいただいた学校には好意的に受け止めて頂き、また、学部の教員からも協力をうけて実施できたことは予想以上の大きな成果であったと受け止めている。また、愛媛県や松山市の教育委員会の強力なバックアップ、さらには広島市教育委員会の指示をも受けることができ、大変よい環境で実施できたことは感謝仕切れないほどありがたいことである。また、9月の期間中多くの学

校を訪問したが「学生はよくがんばっている」「若い人が来てくれると我々の励みにもなる」といった好意的な感想を多く聞くことができ、初年度なりの手応えを感じる事ができた。

参加した学生からは、「教師の仕事の大変さが身にしみてわかった」という声が圧倒的に多かった一方、「やりがいのある仕事であると思った」「こどもがいるのでがんばれる」という前向きにとらえる声も多数あり、教師体験の第一歩としては上々であると感じている。学生の中には、1年生の時より継続的に「地域連携実習」に参加している学生がいるが、1週間毎日、朝から晩まで教員やクラスに張り付いて様子を観察するという密接な体験ができる機会は皆無である。しかも、多くの学生は、自分の出身校で実施している。自分の故郷の後輩達に愛情や情熱を注いで接していることは、訪問した学校での学生の様子からひしひしと伝わってきて、大変頼もしく感じた。

各学校での指導方針は大変個性的で学生たち一人一人がユニークな体験をすることができ、実習を担当する委員としてはとてもありがたく感じた。また、学生には「秘守義務」のことを口酸っぱく注意したが、職員会議に入れていただいた学校、それでも問題ありと判断された学校、それぞれ見識があって良かったと思っている。「自分がいたころは大変荒れていて、先生は大変そうだった…」と語る学生の声を聞きながら、我々にはわからない学校の変化を観察を通じて見て取っていることを痛感した。

最も手応えを感じたのは、愛媛県内はいうに及ばず、県外の学校でも学生の受け入れを快く快諾頂き、丁寧に指導いただいた学校ばかりであったということである。最初は学生たちの個別交渉から始まっているので、おそらく「教育実習をさせてください!」という簡単な説明だけで、要領を得なかったのではないかと予想している。学生たちは、愛媛大学の近隣の学校を除いて、出身の学校や恩師を頼って交渉している。教育実習の受け入れとなると学校全体の問題となる。本年は特に「大学生のはしか」の問題が表面化していたので、我々も対応に追われたが、学校にとっても冷や汗の受け入れであったことは想像

できる。

一方、ふるさと実習意見交換会などでも述べられていた「ふるさと実習とはなにか、私たちは何を提供すればよいのか」という意見に象徴されるように、通常の教壇授業を伴う教育実習とは異なっていて、明確なコンセプトが打ち出せないのは大変残念である。しかし、学部の実習体系を考えると、少しでも早く現場の風にさらして、現場の様子を体感させることは、実践力を求められる教師の卵にとって非常に有意義なものであることもご理解いただきたい。

学生の日誌や省察レポートに、「先生が放課後に教師になることについての充実感を語っていただき、私も絶対に教師を目指したいと思った」等の感想が多数寄せられ、こどもや授業を観察するだけではなく、先生方が時間を割いて語ってくれた十数分の時間が学生の励みになり、一生の方向を決定づけることになるとは思ってもみないことであった。

逆に、大学の教員はそのような気のきいたことを話せないのかというジレンマにも陥るのであるが、現場を持っている教師であるからこそ、また自分が育った地域の学校であったからこそ効果があつただろうと分析している。

種々の副産物を得られた実習であったが、問題点もあった。初年度の活動でありながら、学生の説明が十分でなく実習の趣旨がわからないこと、突然学生から電話がきて何のことが理解できなかったというご意見など、学校現場と大学が十分な連絡体制がとれていないことである。寄せられた意見については、至急検討し、来年度以降の実習に反映させてゆきたい。

すでに現在の1年生への説明会が終了し、新しいスタートが切られようとしている。少しでも学生の意識向上や教育実践力の向上に結びつくことを願っている。

おわりに

手前味噌になるが、3月末に『教育実践体験実習(ふるさと実習)報告書』を発行した。参加の学生すべての心のこもった文章が綴られているので、是非ご一覽いただきたい。